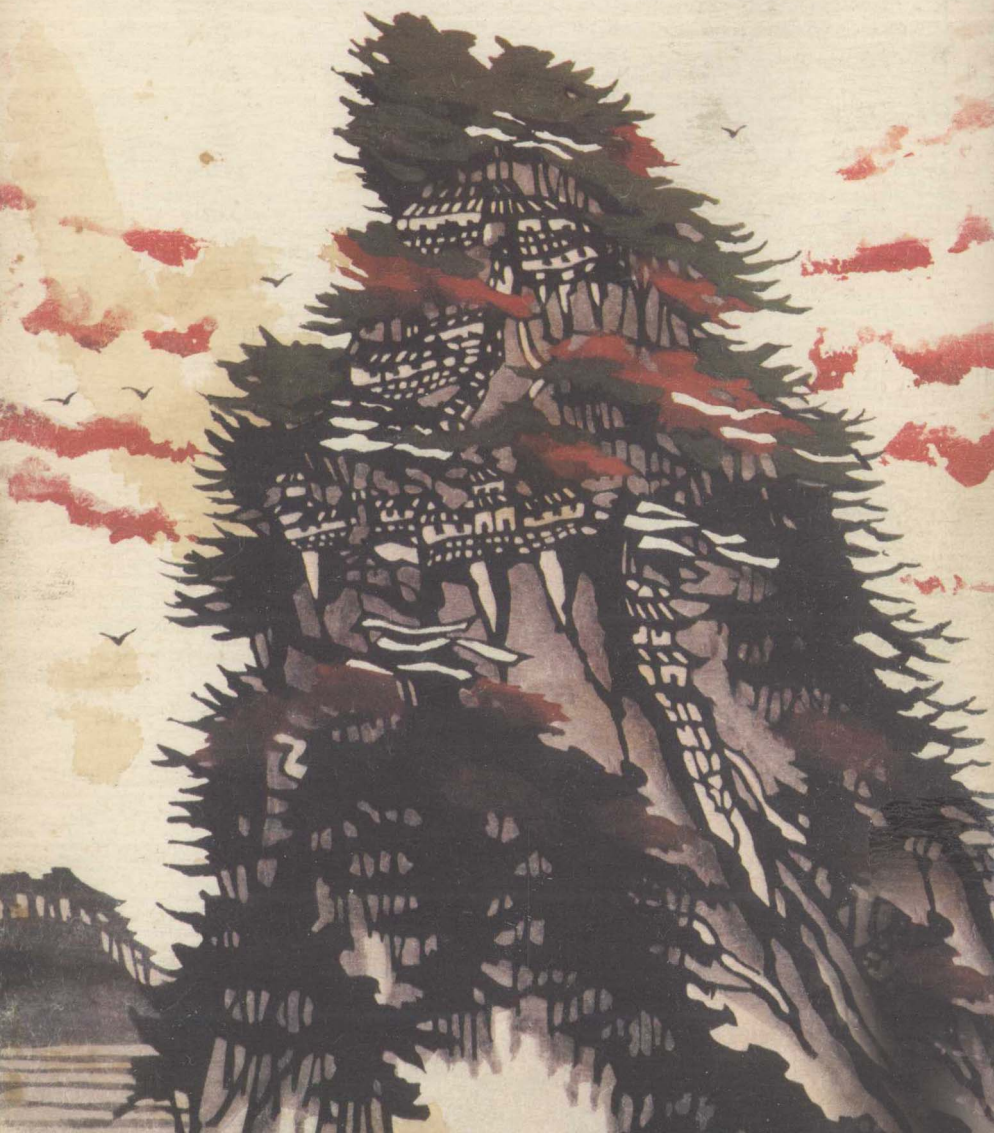


武田勝頼 (三) 空の巻

新田次郎



新田次郎
武田勝頼

(三) 空の巻



講談社

武田勝頼 (三) 空の巻

著者 新田次郎

定価 九八〇円

昭和五十五年五月二十三日 第一刷発行
昭和五十五年七月十五日 第五刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二丁目二二

郵便番号 一一二

電話 (〇三) 九四五一一一一 (大代表)
振替 東京八一三九三〇



印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社黒岩大光堂

©新田次郎 Jiro Nitta 1980 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り替えいたしません。

目次

岡崎三郎信康	7
徳姫様	17
信康自刀	27
海将陸上で死す	37
武田水軍敗る	46
抜け駆けの功名は切腹に価す	55
穴山梅雪、離叛の心を決めること	65
亥の刻出撃	75
嗚呼高天神城	85
先方衆の悲哀	94
鎮 <small>ちん</small> の城	104
血ぬられた上棟式	114

笠原新六郎	123
伊豆仕置と穴山金山	133
人質御坊丸の事	142
酒屋小僧騒動の事	152
『伊勢物語』の行方	160
木曾義昌逆心の事	170
鳥居峠の敗北	179
貞女願文	189
高遠城血染の桜	199
落人 <small>おちゆうと</small> の道	209
武田家滅亡	219
あとがき	230

装丁
川田
幹

武田勝頼
（三）空の巻

岡崎三郎信康

天正七年（一五七九）三月、上杉景虎が自刃したころには、武田勝頼は大軍を率いて遠州国安（静岡県小笠郡）に出陣していた。徳川軍は袋井に本陣を置き、前備えを馬伏塚（静岡県小笠郡大須賀町横須賀）に置いて武田軍の動きを見守っていた。

国安は高天神山たかてんじんの南東に当り、馬伏塚は南西に当る。国安と馬伏塚はおよそ、二里半（約十キロ）ほど離れていた。国安も馬伏塚も、海からほど遠くないところにあった。

双方共に盛んに物見を出して敵の陣容を偵察し合っていた。袋井で軍議が開かれた。席上、徳川家康の嫡男、岡崎三郎信康（長男であるのに三郎と号したのは松平家の代々のしきたりに従ったのである）は自ら希望して馬伏塚方面に出動して物見をしたいと申し出た。

「前線に出て、この目でしかと武田軍の陣立てを見て来たい」

そう云う信康を家康は、

「それは物見がすることであって、そちがやることではない。大将は本陣にあって軍全体の動きを見るべきである」と諭した。

「父上は総大将であるからそれでいいが、私は大将と云っても、名ばかりの大将、もし父上が私を、本当の意味の大将になされないと思うならば、馬伏塚へやって下さい。実戦を経験しない大将などというものは、絵に書いた大将のようなものです。私はそんな大将ではありたくないと思います」

信康は理窟を云った。

家康も信康の言葉には一理があると思ったので、まず、宿老の酒井忠次にそれについて訊いた。

「戦は、遊びごとではありません。大将がああしたい、こうしたいというのをいちいち取り上げていたのでは、軍の統制が取れません、三郎（信康）様もそれくらいのお分りと存じます……」

と反対した。大久保忠世おくだいもほぼ同じような意見を述べた。石川数正は黙っていた。

「そちたちは、この信康を何時までも飾り物にして置こうというのか。戦を知らぬ凡庸な武將に仕立て上げ、徳川家の実権はそち等重臣が握ろうとも思っているのである」

信康は二人に向かって云い放った。信康は激しい気性だから、このくらいのごときは度々云った。しかし、武田軍を前

にしての軍議の席上での放言は家康としても黙っているわけには行かなかつた。

「信康、言葉が過ぎるぞ、忠次等はそちの目的を思って云っているのになんという事を云うのだ」

「ほんとうにこの信康の目的を思っているならば、今日までに、ああ、あの時は忠次に世話になった、この時には忠世に厄介をかけたと思ひ出に残るようなことが幾つかあった筈だ。ところがそういうことは一度だつてない。天正三年の設楽ヶ原の合戦の時だつてそうだ。余は、何回となく前線に出て武田軍と戦いたいと申し入れたが、その二人に反対されて、終に出番は与えられなかつた。武将の子としてこれほどの屈辱はない」

信康は二人の重臣の顔を交互に見ながら云つた。今日はいまままでと違ふ、云いたいことは云わせて貰うぞという、気魄きへくのようなものが流れていた。

「あの時は三郎様はまだ……」

と忠次が云いかけると、

「年齢のことだろう。たかが十八歳では軍を率いて敵と懸け引きはできなかつたと云いたいのだろう。だが、十八歳以下で出陣して功を上げた者は数えきれないほどあるぞ、彼等は、それぞれ、その年齢にふさわしい部署を与えられ、それ相応な働きをしている。ところがどうだ。あの戦いでは、初めから終りまで余は、馬鹿面をして牀几とこざねに腰かけていただけだ」

それからのことだつて、云いたいことは山ほどあるぞと信康は云つた。その云い方があまりにもすさまじいので家康は、しばらく信康の云い分を聞いてやろうという気になつた。

「天正四年の秋、勝頼が三千の兵を率いて現われた時、やはりこの袋井で軍議を開いた。余は、いままこそ勝頼と決戦をする時だと主張した。敵は設楽ヶ原の合戦で大きな痛手を負つている。しかも小勢だ。敵は三千、味方は五千、戦えば勝てる可能性はある。それなのに、決戦をやるうとせず、まるで敵が引き上げるのを見守るような作戦を強く主張したのは、その二人ではないか」

信康は忠次と忠世を指してそう云つた。

「いっさい、わが徳川軍は本気で武田軍と戦う気があるのか。敵の兵力がわが軍より圧倒的に多い場合は援軍を織田に求めるのは当然だが、天正四年の秋の如きはわが方が、数においてはるかに有利であつた。同じようなことが、天正五年にも天正六年にもあつた。勝頼はここから三十里(約百二十キロ)も離れている甲斐の古府中から出て来ている。ところがどうだ此処から浜松城まではたったの五里(約二十キロ)しかない。しかも昔は知らず、今は兵力が倍仲はつちしているのに戦おうとはしない。高天神城が敵の手中にあるということは、徳川家の庭に敵城の存在を許しているようなものだ。だからこそ、何時まで経つても、織田殿にばかにされているのだ」

信康は更に言葉を継いだ。

「わが徳川家がその実力を天下に示すには、独力で武田に勝つことである。それ以外に方法はないのだ」

信康はそこまで云ったが、少々云い過ぎたことに気がついたのでかそこで言葉を切った。

「飽くまでも武田軍と決戦したいと申されるのか」

忠次が信康に訊いた。

「そうは云っていない。今は、ただ敵情の見分をさせてくれと云っているだけのことだ。五百そこそこの武田の兵をその六倍の三千という大軍で平らげたことを自慢したり、織田殿の鉄砲に追われて逃げ出した武田軍の拾い首を狙うような考え方しかできない大將が放った物見は、やはり大將が考えているようなことしか見て来ないだろう。それではいけないから自分自身が行って見て来ると云っているのだ」

と信康は云った。五百の敵に三千の兵が向ったというのは酒井忠次が指揮を取った鳶ノ巣山の戦いを云っており、拾い首云々は久保忠世をさして云っているのだが、この発言は軍議の席にいる諸將を驚感させた。本多忠勝や榊原康政などは、思わず乗り出して、抗議の姿勢を示したほどだった。設楽ヶ原の合戦では、徳川陣の多くは柵を出て武田軍と白兵戦を演じた。武田軍が総崩れになってから拾い首的な手柄を上げたのは、むしろ織田信長に従って来た部隊の將兵だった。

まともな大將でない者が放った物見はまともな報告は持って来ないという信康の暴言も大物見、小物見を出した部將に取っては腹立たしいことであった。が、本多忠勝や榊原康政が結局発言しなかったのは、信康の言葉の中にくつか同感すべきものがあつたからであった。

確かに、酒井忠次が信康を見る目は他の重臣とは違つていた。言葉は三郎様と云っているが、心の中ではなにを考えているか分らなかつた。

「三郎様はいささか変わり者だから……」

などと、子供のころから信康を愛人扱いにしていた忠次が、信康の元服が済んでからは、

「お世継ぎ様にはそれ相応の心掛けこそ、肝要でござる」
などと云つて、高く持ち上げることのみを考えているようだった。その反発が、このような形で現われたのだと思えば、なんとかこの場の様子も理解できるような気がした。

「信康様が望まれるとおりになされたいかがでしようか、ただし脇將としてしかるべき者が必要でしょう。信康様はそれすら迷惑だとは申されないでしょう」
と石川数正が口を出した。

三河の国は、石川数正と酒井忠次の両勢力によって代表されている。その均等勢力の頂上に立つて三河をまとめて来たのが松平氏であった。酒井忠次が、強度の織田寄りの柔軟な姿勢に対して石川数正は、どちらかという三河武

士らしい一徹頑固なところがあつた。その石川数正には信康の云うことがある程度分るのである。

「さよう。大物見となると、なかなか面倒です。もしものことがあると、たいへんですので、この本多忠勝が脇將としてお供いたしましょう」

と本多忠勝が口を出した。

「忠勝の同陣には異存はないが、脇將はごめんだ。余は余のやりたいようにする。余の命令どおりに付いて来るというなら、同陣はさし支えない」

信康は見栄を張つた。本多忠勝ほどの大将を顎で使いたいと云う信康の言葉には並いる部将もさすがにあきれたようであつた。

「同陣で結構です。信康様の云うとおりに動きましよう。

して、大物見の人数は、いかほど連れて参りましようか」と云つた。総大将の家康が、いかにも悪いとも云わないうちに話がとんとん拍子に進んで行くのをあきれ顔で見ている忠次が、

「お館様……」

と声を掛けると、家康はようやく口を開いた。

「忠勝がついておればまず大丈夫だろう。しかし信康、けつして出過ぎた真似をするではないぞ。忠勝を父だと思ひ、忠勝が引き返せと云つたら引き返せ」

家康は最後の方に力をこめて云つた。

信康は、返事をしなかつた。彼は、一文字に唇を結び、

鋭い目を家康と忠次に向けてから黙って席を立つた。

軍議はそれをしおに解散となつた。

信康が軍議の途中で口を出したのは、武田軍に関する情報に適確でない不満からだつた。

一、武田勝頼は三千の精銳を率いて大井川を渡つて国安に着陣している。

一、勝頼着陣と共に、高天神城には盛んに兵糧が搬入され、兵も一部交替している。

一、高天神城を取り囲んでいる徳川方の城砦は一応兵を撤収し、横須賀の馬伏塚と袋井に集結した。

一、武田軍はいままでになく活発な動きをしている。おそらくこれは、越後の上杉と講和した際、貰つた多額の軍資金の影響であらう。

信康の知りたがっているのはこんな大ざっぱなことではなく勝頼が確実に敵陣中にいるかどうか、勝頼は、いままでも同様、徳川軍との決戦を望んでいるかどうか、の二点であつた。もし勝頼自らが先頭に立つて徳川軍に決戦を挑もうというならば、受けて立つべきだというのが信康の考えだつた。

「敵がわが軍と決戦に出るつもりならば、わが軍もそれを覚悟でかかれれば必ず勝つと思うがどうか」

信康は馬伏塚の城砦へ行く途中で馬を本多忠勝のそばに寄せて訊いた。

「必ず勝ちます。そのところは信康様のお考えと同じで

す。敵が決戦しようというのに、逃げることはありませ
ん」

「いままでは逃げた」

「未だに、武田の騎馬隊をおそれている者が多いよう
です。設楽ヶ原の合戦であの大勝を博した今でも、武田の騎
馬隊には勝てないと思ひこんでいる者が多いのは困ったこ
とです」

「酒井忠次がそうだ。ああいう男がのさばっている限り、
徳川はほんとうの強さが出せないのだ」

「お言葉をおつししみ下さいませ。二度とそのようなこと
を申してはなりません。ことと次第によってはお命にもか
かわりませう」

忠勝は馬を止めて云った。怖い目をしていた。信康のた
めを思う目であった。

「分った。もうそのことは云うまい。云ってもどうにもな
らぬことだ。結局は自分でやるしかない」

その言葉が、忠勝にはまた気になった。

「自分でやるとは？」

「いや、ひとりごとだ。なにごと、他人には頼らず独力
で処置しなければならぬと云っているのだ」

信康はそれまでになく慎重な言葉使用であった。しかし
忠勝には、自分でやるしかないと言康が云った言葉の中
に、不穏なものを感じた。

(信康様は重臣酒井忠次を亡き者にしようと考えているの

ではないだろうか)

そんなことはあり得ないのに、そんなことがふと頭の中
に浮び上ったのである。

現在における、酒井忠次は徳川家康より同等またはその
上にあつた。三河の半分を握る大名だということもある
が、織田信長の気に入りであつたからである。なにかあれ
ば信長は忠次を呼んで相談した。そこで決つたことは、織
田信長の命令として家康に伝達されていた。家康は一言も
その決定に口出しすることは許されなかつた。家康は信長
との力の差以上に、家臣団の頭領としての酒井忠次に気を
配っていたのであつた。忠次は益々信長に接近し、家康
は、信長忠次路線の前に従伏していた。

「敵が決戦に出るつもりならばとさきほど仰せられました
が、そのような場合は、不思議に兵たちの気が張り、たと
えば、物見の都合なども、普通の場合ならば、物見が物見
を見ると双方が避けて通るものですが、決戦を意識した物
見は、そうはせず、必ず、打ちかかつて来るものでござい
ます」

と本多忠勝が云つた。

「なるほど、そうもあろう。そういう実戦の匂いのような
ものをおれは嗅いで見たかつたのだ」

信康は忠勝に云つた。

信康は百騎、忠勝も百騎率いていた。大物見というより
も、ちょっとした部隊であつた。

馬伏塚の砦は文字通りの砦であつて、千人ほどで囲んで攻められたら、一日とは持たないようなものであつたが、一応は砦としての形をしていたから、信康と忠勝はその日はそこで馬を休ませることにした。その夜である。遅くなつて下弦の月が上つたころ、忍びの者が帰つて来て、信康と忠勝に報告した。

「寺部のあたりにおよそ五十騎ほどの敵がかくれておりませぬ。どうやら物見らしく、足輕は従えておりませぬ」

寺部は馬伏塚から東方へ一里余(約五キロ)のところにあつた。高天神山の南に當つていて、寺部の西部は低い山陵地帯になつており、東部は小笠川が南北に流れ沼沢地の多い水田地帯になつていた。

「おそらく武田軍はそこに五十騎を伏せて置き、いざという場合、遊撃隊として使うつもりであらう」

物見の報告を聞いた信康は云つた。

「まずは、その御觀察は正しいと存じますが、相手は武田勝頼、油断はなりません。なにごとともそうと決めてかかることは危険でございます」

「その他にどのような見方があるのだ。云つてみるがよい」

信康は、自分の意見にけちでも付けられたかのように聞き直つた云い方をした。

「誘いという手がございます。五十騎を餌にわれ等を誘い

出して討ち取ろうという策謀でないと云い切れまじょうか」

「だが、そこには五十騎しかいないという物見の報告だ」「わが方の物見の目に発見できないようなところに隠れているかもしれないし、またほかの何等かの手立てを考えているかもしれない」

本多忠勝は云つた。

「誘いなら、誘いに乗つたように見せかける手もある。要は敵が決戦を望んでいるかどうかだ。もしそうだとすれば、こちらが動けば、必ずや何等かの反応が現われる筈だ。そのようなことを、きのう、そちも云つたではないか」

「軍全体が決戦の気構えしていると物見もふだんと違つて好戦的になると申し上げました。寺部にいるのが敵の物見なら、わがほうも少しまよつた物見を当てて、つつき出してみるのもよい方法です」

「その物見を余がやろう」

「それは困ります。三郎様は大将です。大将自ら物見に出るなどという事は許されませぬ」

「なんだ。それでは袋井での議論の蒸し返しだ。とにかく余は明朝寺部を襲つて、武田の騎馬隊を痛い目に合わせてやるぞ。敵がどう出るかは、その後の動きで分るだらう」

信康は忠勝がいかに止めても聞こうとしなかつた。強情な男だつた。

「では、私もお供をしましょう。しかし、私が退けと云つたら、私の云うとおりにお退き下さい。これだけはお館様の言葉どおりにすると約束していただければ、私が腹を切らねばなりません」

信康はそれを承知した。

翌朝未明、信康は騎馬武者百騎、足軽三百人、本多忠勝もほほそれだけの人数で、寺部へ向って繰り出した。この辺の地理にくわしい者を道案内人に立てての進撃だった。寺部の近くまで来ると、先に物見として出して置いた数騎が駆け戻って報告した。

「寺部には敵の姿がありません」
 「そんな筈はない。少なくともわれらが馬伏塚を出発する直前まではいた筈だ」

と本多忠勝は一言洩らすと同時に、ほとんど反射的に、

「敵の畏だ。まさしくこれは敵の陥穽だ……」

忠勝は、そう云うと馬に鞭を当てて、信康の傍に駆けつけ、

「すぐ馬伏塚にお退きください。われらは敵の畏にはまうけています。はや、お退きください」

と云った。しかし信康は、大して驚いた顔を見せず、

「敵が居なくなったからと云って、われ等が敵の陥穽に落ちたという証拠がどこにあるのだ。落ちたかどうか、確かめるまで退かないぞ」

信康は強引に馬を進めようとした。

この時である。海岸方面へ出して置いた物見が帰って来て、

「敵の大軍、浜野のあたりを海岸沿いに西に向って攻め寄せて参ります」

と報告した。

緊急の場合だから大軍という表現を使った。それほど来襲は急のようであった。

国安から馬伏塚に通ずる道はあるが、馬二頭が並んで走るともやっとくらしい狭い道である。この道を通って大軍の進撃は不利と見て、武田軍は海岸沿いに進撃を開始したのである。敵の目的は馬伏塚の砦を封鎖し、信康と忠勝の二隊を取り囲むためであった。

敵の大軍が海岸沿いに攻めて来ると聞いた信康は、はっとした。その時になって彼は自分たちが敵の陥穽にはまうことを知った。彼は顔を蒼白にして云った。

「退るか、このまま進んで血路を開くか」

「敵の大軍が浜野のあたりを西に向って前進したというならば、おそらく今ごろは、馬伏塚のあたりに達しているでしょう、われ等は退路を断たれている」

忠勝が云った。

「では進もう。それ以外に道はないだろう」

信康は云った。

「おそらく、前方にも敵が待ち受けているでしょう。しかし、今となったら北に進むより道はございません」

忠勝は云った。

信康と忠勝の率いる部隊は寺部に入った。予想したとおり、国安から派遣されて来た武田軍が進路を遮断していた。

「今だ。今のうちなら、通り抜けられる。沼沢地の間を斬り抜け、土方に出て、小笠山の峠を越えて袋井へ抜けよう」

と忠勝は進路を示し、それぞれの部隊に案内者を立てた。

寺部に五十騎を置いたのは武田軍の計略だった。その計略に引っかけた、信康と忠勝が出て来たという情報を掴んだ勝頼は主力を海岸沿いに西進させて馬伏塚の砦を包囲し、内藤修理亮昌月が指揮する三百騎を寺部に向けた。

勝頼の考えでは、信康、忠勝の部隊は、必ず馬伏塚に引き返すと思っていた。そうなれば、馬伏塚の城砦にこもる徳川軍は信康、忠勝の軍を救うために城砦を出て戦うだろう。その兵力合わせておよそ、千五百ほどになる。勝頼の率いる二千五百の兵はこれを押し包んで討ち取ることになるだろうと考えていた。だが、徳川信康と本多忠勝の軍は馬伏塚には帰らずに北に逃げようと決意した。従って、内藤昌月の率いる上州軍と信康、忠勝の三河軍とが血みどろな戦いをする事になった。

内藤修理亮昌月は名將と云われた内藤修理亮昌豊の子である。彼は設楽ヶ原で戦死した父の名を継いで大將になっ

たが、実戦の経験には乏しかった。もし彼の父昌豊がこの場の大將だったら、沼沢地の所要所を人数でかためて、信康や忠勝の軍が土方方面に抜け出る道をふさいだであろう。相手と戦って首を取ることを考えるより先に、退路を遮断することをまず考え、やがて、本隊が到着した時、袋の中の鼠となった敵を討ち取ろうと考えたに違いない。そうするには絶好の地形だった。

しかし昌月は若かった。彼はなにかと云うと名將内藤昌豊の子だと云われた。だから名將の子にふさわしい手柄を早く立てたいと思っていたところに、好餌が現われたのである。

「進め、進め、敵を一人も逃さず討ち取れ」

と彼は号令した。敵の退路を遮断せよという命令を出さずに進んで戦えと命じたのであった。

田植え前の田圃には水を張ったものもあり、そうでないものもあった。合戦は沼沢地をさけて、田圃の周辺で行われた。

騎馬隊がその能力を自由に生かすことのできるような地勢ではなかったが、両軍とも馬を主体としての戦争をやった。

内藤昌月は三百騎に足軽九百人、合計千二百人であった。これに対して信康は百騎に対して足軽三百人、本多忠勝もほぼ同数だったから、合計八百人であった。人数の差はたちまち表われた。徳川軍は次々と討たれて行った。